



## モットーは“肩ひじ張らずに”

有竹正寿 / ありたけ・まさとし  
ネグロス・キャンペーン岡山

ネグロス・キャンペーン岡山（以下・J CNC岡山）は、今年で発足25年を迎えた。緊急救援から始まったJ CNCがこんなに続くとは思っていません。……  
10周年のときに作成した記念誌「We dream the same dream」（日本語訳「お互いさまじゃけえの」）を読み返してみると「よく10年も続きましたねえ」という感想が多くの方から寄せられている。私自身もまさか10周年はないだろうと思っていた。しかし、当時の前島宗甫J CNC代表からは、「日本近代化の中で100年かかって歪められてきた日本とアジアの関係を正すには100年かけて変えていくことが必要だ。あと90年はやり続けねば」とのメッセージをいただいている。うーん、25年で感慨に浸っている暇はないということか。また、J CNC岡山の梅田環代表は10周年のメッセージの中で「事がら自体がこれは根の深い問題だ、また、時間のかかる課題だ、とこちらの浅はかな思いを思い直させ、考えを変えてくれるのだ」と記している。まさにそのとおりだと思う。

25年を振り返ると、岡山に来てくれた多くの人びとの顔が浮かんでくる。全国砂糖労働者連盟（NFSW）のサージ・チェルニギンさん、その歌声で岡山の人びとを魅了したデッサ・ケサダさん、ノール平和賞候補になったアントニオ・フォルティッチ司教、10周年を機に初めて民衆組織からのゲストとなったランゴンバナナ生産者協会（BGA）のチータ・タカタさん、疲れるほど歩かせてしまったベン・エスクロポ神父、エスペランサのリト・エスタマさん。他にも多くの方々が来てくれた。岡山からも多くの若者たち（もちろん若い人も）がネグロスを訪ねた。一つひとつが宝物のような出会いと交流だったと思う。そう、J CNC岡山のモットーの一番は「交流する」、二番が「学び知らせる」、そして三番が「支援する」なのである。25年も続けてこられたのは、この肩ひじ張らないゆるいモットーのおかげかもしれない。このモットーを掲げJ CNC岡山はネグロスの人びととともにこれからの75年を歩んでいく!! ■

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」（水たまり）が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

### CONTENTS ■ HALINA 15 2012.03.01

02	Relay Essay ポコポコ 15	モットーは“肩ひじ張らずに”◎有竹正寿
03	【特集】放射能下で生きる — つくる人と食べる人、それぞれの思い	座談会◎上野 香、山木暖子、秋間香枝子、（聞き手：西沢江美子） 大消費地・東京を選んだのだから 子どもと共に決めた食べもの◎沢 理恵 納得したものをつくり、食べるために◎市橋秀夫
10	【Topics】	APECホノルルレポート◎上垣喜寛
12	【Column】	水俣と日本の今③ 「思い」を継ぐ◎原田利恵 マイストーリー in ジャパン③ 【イラク】フリード・ホマディさん 仙人の雑談・濫読③ 震災・音・言葉◎秋山真兄 Have you ever seen the Cinema?⑨ 『迷子の警察音楽隊』◎重政栄一郎
14	撮っておきアジア 15	フィリピン・ネグロス島◎小椋咲子
15	APLA生活 15	ラオス産アラビカティピカ豆を使用した フェアトレード・ドリップパックプロジェクト◎箕曲在弘
16	【Voice from APLA partners】	【インドネシア・パプア州より】インドネシア・パプア州からのチョコレートを応援！ 【東ティモールより】コーヒー生産者に対して米を緊急支援しました。
17	事務局便り	
19	APLAボジションペーパー	福島とともに — 東日本大震災、そして原発事故を受けて

### 表紙のことば

#### 王宮のバティック文様 “バラン”

このバティック（インドネシアのジャワ島を中心に発達したろうけつ染め）全面を覆うS状の螺旋模様バラン、そしてこの大胆なバラン模様を囲まれ大きな羽を持ち力強さを見せるガルーダ（インドの神話に登場する神鳥）。もともとバティック文様バランはクリス（インドネシアの守護刀）が原型であるといわれており、かつては王族や王宮に仕えるものだけに着用が許されていた。現在では、一般市場にも出回っている。その神秘的なパワーは今もって衰えることなく、バラン模様を体に纏うと誰もが凛とした顔つきになるような気がする。

最初はその大胆さに驚き、全く異質なものを感じたが、慣れ親しんでいくとその文様は、祖母の桐箆筒にしまわれている着物か、知人宅の畳上に敷かれたカーペットだったのか、ふと懐かしさを感じることもある。遠く離れている国がぐっと近くに感じられる瞬間だ。そのひと時こそ、バラン模様が私を引き付ける魅力となっている。（稲葉博子）

# 特集 放射能下で生きる

## つくる人と食べる人、それぞれの思い

先行きが見えない原発事故と放射能禍。それは人と自然、人と人が互いにかかわって生きるつながりを断ち切ってしまいました。なかでももっともつらく不安な状況に置かれているのは、子育てをしながら土を耕し、種をまくむらの女たち、日々の食卓の“安心”に頭を痛めるまちの女たちでしょう。しかしそれでも人は生きていかなければなりません。今号はそうした人たちの思いを率直に語ってもらいました。びっくりしました。現実をきちんと見据える視線の確かさ、土に根を張って生きようとするたくましさ……。本誌を手にとっていただく皆さんとそんな思いを共有したいと、編集作業に追われながら痛切に感じました。読んでください、そして一緒に考えてください。（編集部）



上野 香さん

### 【座談会】

西沢◎福島第一原発の原発事故が起こり、食べるが大変な時代になってしまった。子育てをしながら、農業を生業とし、色んなものを背負っている女性の方から話を聞きたい。

上野◎原発事故後、食べものについて不安をあまり気にしないようにしている。これまでと変わらずとれたものを食べ、子どもにも与えてきた。この時代に生まれ

た宿命だと思っている。食べないほうがよいと言われることもあるが、なるべくバランスよく食べることにしている。自分がつくったお米からも3ペクレル（白米）が検出されたが、別のところから0ペクレルのお米を探してきて子どもに食べさせるといふ頭にはならない。それが間違っているかもしれないし将来「お母さんのせいではないけど、それも引き受けるしかない」と思っている。

今回の事故で飛びぬけて世の中がひっくりかえったとはいえず、これまで本当に安全に暮らしてきたかと考えると、必ずしもそうではなかった。例えば、食品添加物の問題、水俣病や東海村のJCO臨界事故などがあったなかで、今回

が、広島、長崎の原爆以来だったという話ではないか。会う人ごとに地震や放射能の話が出て、「二人目は生まない」という話を聞いた。これまでも公害や人間が犯した事故があったが、その恩恵をあくまで覆っていた。それなのに、事故があったが、その恩恵を覆った。東電だけに文句を言ってもしかたがない。自分の生き方そのものを変えていく、それを伝えていくしかないと思っている。



東峰べじたぶるんの皆さん。



三里塚ワンパック収穫祭の様子(2011年11月6日)。

山木◎減ってどうなるか心配だったが、一年を通して見てみると産後で自分が仕事をしていなかった去年より売り上げていた。売り先のなかで、原発後も最初から影響を気にしてないところは、相変わらず去年と同じかそれ以上に頼んでくれる。気にしているところから

秋間◎うちは、自主流通をいくつもかもっているの、それぞれの売り上げが少しずつ減った状況。ただ、貯金は全然ない。これまでは冬の出荷が少ないから、冬までの蓄えで生活していた。今年はその余裕がない。瓦の修理代、避難費用の出費もあった。普段だったら北海道なんてそう行かないのに、今年は二回も行ったから。

西沢◎皆さんは、今回「成田有機の里・農ママの会」として東電と成田市に問題提起をしているが、これについて教えてほしい。

山木◎原発事故後、人それぞれ多様な価値観があると思った。何に對しても。だからこそ他の人の意見に色々言うことができないなど痛感した。本人が正しいと思えば選んだことであるなら、残るといふ選択もそれで正しいと思う。

上野◎西から取り寄せるといふのは、お金と手間をかければできるだろうけど、実際は大変だと思う。でも大変さよりもその人からみた安全性をとるのが重要ならばそれはしかたがない。私たちの野菜を買っていた人が止めるのも引き止められない。原発とは関係なくワンパックの販売は下がっていた。原発事故後に更に落ち込んだとい

西沢◎売上げが減ったことにより、暮らしが大変になっていないか。

秋間◎計測して検査結果を提示したり、色んな人たちに助けられた。



秋間香枝子さん

の原発については事故が起きる可能性がないという情報だけで、安全だと思っているのだろうか。

子どもと大人が別のものを食べていることについてはどう思う？

うのが実情。野菜をつくらせている人のことを伝え、売り方も工夫すれば、もっと販売に出て行くことはできるし、買ってくれる人もいると信じている。例えば、今年のワンパックの収穫祭(2011年11月)には、雨の中170人くらいが来てくれた。ブログを見て東京からも来てくれた。お客さんとのつながりはむしろ強くなった。

は、去年の1割以下の注文しか来ない。千葉の野菜が売れないと、それを販売する人たちも会社が潰れてしまうので、お互いに協力したり、頑張っって新しい売り先を探したり、計測して検査結果を提示したり、色んな人たちに助けられた。

【座談会参加者】

上野 香

33才。子ども:5才(男)。自家用のお米をつくっている。三里塚ワンパック、東峰べじたぶるんの事務担当。成田市での生活は13年目。

山木 暖子

32才。子ども:1歳8カ月(女)、第二子を妊娠中。農大出身。学生時代に野菜のおいしさに出会い、それを広める仕事をしたいと思っていたが、作るほうに楽しさを感じて方向転換。現在は、山武市で連れ合いと三つ豆ファームとして生産。2012年で8年目。

秋間 香枝子

38才。子ども:8才(男)、5才(女)、3歳(女)。農大出身。大学卒業後、青年海外協力隊でパラグアイへ行く。帰国後、有機野菜を流通している会社での研修を経て、三里塚ワンパックと知り合い、それからの付き合い。

聞き手:

西沢 江美子 / にしざわ・えみこ  
農業ジャーナリスト

山木◎普段はあまり心配しないタイプだが、さすがに今回はどうしたらいいかと悩んだ。当時は様々な情報が飛びかっていたので、子どもには何をあげたらいいのか迷い、自分がつくったものをあげるのも不安だった。野菜の検体を出し、数値が出はじめて、それがいなら大丈夫かなと思うようになった。



山木暖子さん

当初は連れ合いの実家がある九州に2週間くらい避難した。帰ってきてからは、外には出ても、子どもを畑には連れて行けなくなり、さみしさがあつた。洗濯を外に干さず、掃除をして埃をふいた。古い家だから外も中もあまり変わらなかつたけど(笑)。「絶対これダメ」、「絶対外で遊ばせない」ということはできないし、土も畑仕事をしてお父さんが運んでくる。

ゼロにはできない。色んな情報を見るうちに、自分の身体の抵抗力を守る力をつけさせていきたいと考えがシフトしていった。子どもの食べものをいつも担っていると思うと、結局そこに落ち着き、そこで頑張ろうと思ったお母さんは多いのではないかと。

秋間◎メンバーの中では最後まで落ち込んでいた。事故後は妹が住んでいる北海道へ避難し、夏休みも子どもたちを行かせた。働きたがら、ここで生きていていいのかわ



2011年12月27日、千葉県成田市にある三里塚ワンパックの研修所にて。

西沢◎子育てをしている同じくらの年代の人で、放射能の影響を分

上野◎そもそもその人たちの言う「安全」が、何を基本にした安全なのか。今回は福島で事故が起きたけれど、佐賀の玄海原発だって放射能漏れがあると聞く。他の54基

実った米の収穫作業。9月、成田市にて。



〔注〕三里塚ワンパンク... 1976年より千葉 県成田市とその周辺 北総台地の肥沃な畑で 完全無農薬・有機栽培 で野菜づくり、会員 に直接届けている。  
〔注〕東峰へじたるん... 2006年からスター トした無農薬野菜の出 荷グループ。メンバーの ほとんどが非農家出身 の新規就農者。

秋間◎東電と成田市への交渉の話 し合いが集まった時、年配の男性 たちと母親たちの視点が違った。 男性たちは、どうやって東電から 補償を勝ち取るかというのが話の メインだったが、私たちはもっと 日常生活に近いところで市に対し て発言したかった。だから、それ をまとめて「農ママの会」として 要請書を出した。

これを受けて、成田市が食品検 査機を2台入れてくれた。しかし、 1kgあたりの検出限界が40ベクレ ルと高く、「検出せず」という結果 が出て心配は残る。自分が野菜 を作っていくうえでもあまり参考 にならない。ただ、それが市とし

ても精一杯の対応。簡易型機械で も460万円で、それより上の性 能の機械とすると1台何千万円も する。午前中は給食の食材検査で 時間をとるので、そのほかの検査 は10分と決めて数をこなしていき たいという。もし改善点として要 求するとしたら、検査時間をもっ と長くしてほしいということぐら いしか言えない。(その後、成田 市は測定時間も20分とし、検出限 界を30ベクレルに変更した)。

上野◎今度定められる新しい基準 値の検出限界数値が厳しくなる。 乳幼児の飲料水の値が10ベクレル となったら、検出限界が10ベクレ ルの機械でないと難しい。市はそ ちらにも予算を割かなくてはなか なくなるだろうから、機械の台数 を増やすのは難しいだろう。

西沢◎今後この状況は、長く続く と思うが、自分たちの経営も含め て、どうやっていきたいかを教え てください。

秋間◎この先も楽観はしていない。 今後何年付き合わなければならな いかは分からないが、ちゃんと測 定し続けながら、現状を把握して 販売していきたい。原発事故前の ように気軽に「安全ですよ！」と 宣伝はできないが、地道につくっ てそれにつきあってくれるお客さ んがいれば、そのために頑張っ て つくって売り続けたい。野菜づく りに関しては、土の中の腐植が多 いと、それがセシウムを吸着させ ることが分かってきている。いま でみたくに堆肥は投入できないが、 有機物を選んだり、緑肥をいつも

より増やしてすきこむことを繰り返 し、土の豊かさだけは保ちたい。

山木◎今後も分からないことだら けの状況が続くと思うので、測定 は続けていきたい。今妊娠してい る子が生まれてきたら、母乳をあ げることになるので、特に食べも のに関しては気にかけることが増 えてくる。今後も情報は色々とい

れておきたい。

上野◎不安を感じているお客さん から連絡が途絶えないし、「こ んな大変な時だからこそ、ちゃん と数値を出してくれる東峰べじた ぶるんの野菜とつながっていて、 すごく助かりました」という声も 同じように届く。今までやってこ なかった「検査」という仕事が増 えるが、それは、結

果をお客さんに出 し 続けると同時に自分 たちの確認のためにも 必要な作業になる。 迅速に数値を出すこ とでお客さんの信頼 を得ると考えている。 そうして信頼してく れるお客さんが増え ていくようにしてい けたらいいと思っ ている。■

## 成田有機の里・農ママの会 東京電力と成田市への申し入れ書

### 福

島第一原子力発電所 の原発震災は、日本 だけではなく世界中

に放射能をまき散らし、その 収束はまだまだにめぐらされてい ません。私たちは子どもを育て、 有機野菜を育てる母親です。今 まで誇りを持ってつくってきた 野菜や土壌が、放射能によって その価値が全く意味を持たない ものになってしまったのかと疑 問を持ってしまふ悲しい現実 直面しています。また、無味無 臭の放射能が子どもたちにどの ような影響を与えるのか心配す る毎日が続いています。自分た ちがつくった野菜を子どもたち に食べさせられるのが自慢だっ たことが、今では100%自信 を持って与えられないことに悲 しみを覚えます。それでも、以 前とは全く同じ環境にもどるの は難しいけれど、私達はここ成 田で農業を続け子育てをしてい かななくてはなりません。

■以下、東京電力への申し入れ 内容(2011年8月30日)

今回の事故は、「原発は安 全」とアピールし、事故後も情 報を隠し続け多くの市民を被ば くさせた東京電力と歴代の日本 政府による「人災」です。特に 加害者である東京電力は企業責 任を果たすべきです。このこと から、東京電力に対し申し入れ を行います。

私達は祈りを込めて以下に要 求し、東京電力からの回答を求 めます。

- 1、福島第一原発の状況や、放 射能汚染の情報を徹底公開し てください。
- 2、各自治体の食品検査や土壌 検査、除染をしてください。
- 3、福島の子どもを被ばくから 守ってください。
- 4、東京電力の全ての内部留保 の資産を、原子力被害者の生 活保障や健康保障に回して ください。

- 5、東京電力が管理する全ての 原子力発電所を今すぐ停止し てください。
- 6、人の命を犠牲にする原子力 ビジネスから撤退し、再生可 能エネルギーへ転換してくだ さい。

今回の事故は、地震列島日本 における原子力発電の恐ろし さと、「人間と核は共存できな い」ことを世界中に知らしめま した。私たちは、なぜ東京電力 がそれほどまで原子力に頼るの か理解に苦しみます。私たちは 同じ子をもつ親であるはずす 日本だけではなく、世界中の子 どもたちのためにも、原子力か ら撤退するべきです。

■以下、成田市長への申し入れ 内容(2011年8月30日)

今回の事故は、地震列島日本 における原子力発電の恐ろし さと、「人間と核は共存できな い」ことを世界中に知らしめま した。子どもたちの未来のため に、成田の生産者、消費者のため に以下のことについて要望し ます。

- 1、土壌農作物に含まれる放射 能物質検査を迅速、かつ日常 的にできるように、成田市独 自に行えるようなシステムを 作ってください。
  - 2、土壌、農産物の放射性物質 の検査の費用を助成してくだ さい。
  - 3、食品に含まれる放射能物質 の検査を成田市独自に行っ て ください。特に徹底した学校 給食の検査と、現在の食品の 暫定基準が子どもに対しても 安全だという証明とその責任 者を求めます。
  - 4、年間の被ばく限度量1ミリ シーベルトを守ってください。
  - 5、学校単位で放射線測定器を 設け、空間線量の常時公開を してください。
  - 6、専門の除染作業員や、放射 能に関する専門の相談室を設 けてください。
  - 7、国際都市成田から、自然エ ネルギーやエネルギーの自給 自足を促進してください。
  - 8、平和宣言都市成田として、 日本にあるすべての原子力発 電所の全面的停止へ向けて声 をあげてください。
- 宜しく願います。

# 大消費地・東京を

## 選んだのだから

### 子どもと共に決めた食べもの

沢理恵 / さわ・りえ  
主婦

3・11以来、私は「食べる」ということを真剣に考えるようになりました。中学1年の息子と小学5年の娘を持ち、ローンで求めた武蔵野の風景を残した環境良好なマンションで、家族5人まあまあ幸せに暮らしていました。そういう時間がずっと続くと信じていたのに、あの東日本大震災と原発事故は、一瞬のうちにそのような時間を壊してしまいました。しかし、性格がいかげんなせいか、原発事故の放射線汚染状況を受け入れるのは早かったです。

振り返ってみると、現実を冷静に受け入れられた大きな理由は、夫の父母の存在があったからだと思います。夫の実家は長野の農家。老いた父母は二人だけで農業を営んで生活しています。それだけでなく、米から野菜、果物、そして母が作ったみそや漬けものまで、

#### 潰された東日本の食べもの

震災によって東北地方からの食べものが来なくなるのは、十分わかっていました。ところが、福島原発事故によって、あつという

#### 「この不安」受け止め、歩こう

私は今、自分の生き方を整理しています。色々なことがあって、子育てから老後までの地として東京を選んだのです。その時は深く考えていなかったかもしれませんが、原発によるエネルギーを「無意識」に選んでいました。今から、これをやめ、やめさせる行動を小さくともとっていくべきと考えています。同時に、食だけを例にとってみても、「無意識」であろうとその便利さを選んできたことが、結果としてとても不安な状況を作り出してしまいました。この不安を受けとめ、少しでも解消へと向かう行動をとりたいたいと思っています。

買いたいものは、できる限り東日本産のものが多く並んでいる店で旬のものを、できれば、測定値が記録してある福島県産ものを探します。乳、卵、肉などは、生産者がわかっている、検査測定している生活クラブのものを。魚は、深海のものやめ、キノコは測定値が公表されているものにし、果物は、季節もので測定値公表されているものを。など、家族と話し合っ

います。

当然、料理にも気をつけ工夫します。外食をする際には産地や料理方法などを聞くこともあります。

## 納得したものをじっくり、食べるために

市橋秀夫 / いちはし・ひでお  
APLA理事・埼玉大学准教授

「町ごと消滅しそう」——福島県北部に隣接し福島原発から60キロ圏内に位置する宮城県丸森町についての新聞報道(「東京新聞」2011年12月26日夕刊)の見出しである。人口1万5千人の中山間地域で、近年は農業体験のグリーンツーリズムで知られ、都会からの移住家族も増えてきていた。しかし、原発事故のあと農作物は売れなくなり、イターンで移り住んでいた十数世帯も町を離れた。チェルノブイリ原発事故を機に横浜市から丸森町に移住して自然農法の野菜を買ってくれる人は安全には敏

何よりもバランスのいい食べ方ができるように、「あれだめ、これだめ」のない食の状況を作りたいと思っています。■

感で、「野菜作りは自家用と検査用だけになったという。原発事故以後、有機栽培野菜の生産農家が最も困難な状況に置かれているという話をたびたび聞く。農協を通した売り上げはあまり落ちていないのに、有機栽培農家は安全性にこだわる自然派の消費者から見放されがちで苦境にあるという。

#### 消費者として抱えたジレンマ

東京都23区に住むわが家(夫婦+3歳児)も「自然派」で、低農薬や有機栽培の野菜を買って暮らしてきた消費者である。長年生協を利

間に北関東から北の野菜や米が消費してしまっただけで、生活クラブ生協の組合員である私が頼りにしていた商品(消費財)カタログからもなくなりました。時間が経つにしたがつて、北海道や北関東の一部の野菜はスーパーに出てきました。それでも福島産は見かけませんでした。生協のカatalogで「東北のもの」と一まとめにしたものが出はじめても、「福島」は見えてきません。これが生産者の訴えている「風評被害」というものだと思うまでに悩みました。友人たちは、「福島」産が放射能で汚染されていて不安だからと、消えてしまったことをあまり気にしません。そんなまわりの意識にも悩みました。原因は原発事故、そしてそれをすすめてきた政府や東電にあるのに、そのことをあまり考えないで「福島」産だけを排除するのです。そんな状況が一番私を不安にさせました。本来、食べものは色々あって、それを自由に選べ、求めることができ、食べられることこそ基本だと思っていたからです。そのことを私を含め、ほとんどの人が放ってしまったことに気がついたのもこの時からです。

用してきたが、生産者とのより強いつながりが持ちたくて、近年は産直を中心とするようになってきた。そこに原発事故が起こって、慌てふためき、悩んだ。買い続けるのか、それとも、少なくとも当面は関東以北の生産物は買わない、食べないことにするのか。食べなければ、それは生産者を窮地に立たせることになるのか。

とりあえず、関東以北で収穫された葉物野菜やブロッコリーは、私たち大人は食べるが、子どもには食べさせないことにした。毎週野菜を送ってもらっている千葉県の生産者グループは当初から生産者としてのジレンマを言葉で伝えてくれたので、こちらも率直に「葉物は子どもには食べさせませんが、大人の方は食べ続けます」とメールで連絡することができた。今はもう子どもと一緒に食べているが、安全性ということを色々突き詰めて考えてみると、解決してないジレンマが自分の中にも残っている。

#### 対話ができる場を

「許容量」という考え方で、放射能汚染をこまめには安全という

言い方はできないはずだ。許容量内であればあなたも無害であり安心できるかのような言説に根拠がないことは、核実験や水俣病をはじめとする多くの公害の経験が明らかにしてきたことではなかったのか。そして今回、国内の農産物は多かれ少なかれすべてが汚染されたと考えざるべきだろう。安全といえるものなどもうどこにもない。だからこそ、なおさら、生産者と消費者は状況に応じた対話を続け、自分たちが納得のできる安全性の考え方を互いに確認し、更新し続ける必要があるのではないか。

わが家が加盟していた生協は、生産者を支援することを優先するという理屈で、自らが掲げてきた許容量(安全性基準)を国の基準に合わせて緩めた。この生協には、自分たちが生産者をよく知っているという驕りがあると感じた。こうした許容量緩和を、生協と取引のある生産者は本当に納得しているのだろうか。APLAは今後も、小さくとも、両者が率直に思いをぶつけ、深く話し合うことのできる場の形成に取り組んでほしい。

# APECホノルルレポート

上垣喜寛 / うえがき・よしひろ  
TPPに反対する人々の運動・事務局

## 野

田首相は11月11日の記者会見で「明日から参加するホノルルAPEC首脳会合において、TPP(環太平洋連携協定)交渉参加に向けて関係国との協議に入る」と発表した。直接の参加表明ではなく「関係国との協議」に表現をどめながら、「貿易立国として繁栄を築いた我が国が、現在の豊かさを次世代に引き継ぎ活力ある社会を発展させていくためには、アジア太平洋地域の成長力を取り入れていかなければなりません」と述べ、TPP参加の必要性を強調した。

私はこの発表をアジア太平洋経済協力会議(APEC)会場のホノルルで聞いていた。個人有志が集まり昨年末から活動している「TPPに反対する人々の運動」の事務局として、「Moana Nui Conference(モアナ・ヌイ会議)」という市民会議への参加とシンポジウムの開催を企画し、北海道や新潟の農民とともに現地に向かっていった。日本がTPP交渉への参加に向けて着々と各国との調整を進めていくなかで、世界の視

点からTPPはどのように見られているか、日本の参加はどう捉えられているか、世界中から集まる人びとの意見を聞いて歩いた。

## 大企業優先のTPPが招く最悪の結末

11月9日からハワイ大学で開催されたモアナ・ヌイ(「ハワイの先住民マオリの言葉で、広い海」)会議には、私たち「TPPに反対する人々の運動」のような市民団体や研究者、農家、労働者、そしてハワイ先住民など約200人が集まり、TPPをはじめアジア太平洋地域の経



ホノルルでのデモの様子。

済や軍事、外交問題などについて意見が交わされる場となった。私たちはメイン会場とは別に独自セッションを設け、3月11日の東日本大震災と「震災復興」の名の下にすすめられる新自由主義的復興計画の動きを発表し、震災復興やTPPなどについて参加者意見交換をした。

「各国の独自ルールを外国、特に米国企業に決められてしまうのがTPPです。TPPの目的には『公衆衛生政策』や『資源の所有権』など通常のFTA(自由貿易協定)では対象にならないかかった分野の自由化が含まれています。TPP参加で影響を受けるのは日本人びとで、震災で被災した地域の復興にも影響が出るでしょう」と言うのはニュージーランドのジェーン・ケルシー教授(オークランド大学で、震災復興に乗じた日本のTPP参加に懸念を示した)。

米国でTPPや反グローバリズム運動をけん引している団体「パブリック・シチズン」のロリ・ワラック氏も参加し、「TPPは私たちそれぞれが持つ文化や社会システム、生存権への攻撃です。企業の力を最大限発揮する

TPPは農業だけでなく、医療、保険、その他多くのことを破壊します」と企業の意向が人びとの暮らしに直結する問題点を述べた。



「TPPに反対する人々の運動」も、ホノルルでのデモ行進に参加。

関する法的制約をも含めることとなった(同60頁)と指摘し、「NAFTAやWTOが発効して以降の負の遺産」の具体例として「米国内での製造分野での500万人の失業」「平均賃金の低迷」「米国の貿易赤字は1020億ドルから最高8070億ドルに拡大」などをあげてきた。

2010年10月1日の菅直人元首相所信表明演説以降、日本国内のTPP推進派は自由貿易がバラ色の世界をつくり出すかのような論理を展開してきた。ワラック氏はNAFTA合意以前の米国と現在の日本を照らし合わせ、「TPP交渉に参加すれば日本で起こることは想像できます。単なる貿易だけの話ではなく、影響が出るであろう多くの人びとに伝えることが最も重要」と日本のTPP参加に警鐘を鳴らしながら、今後の反TPP運動に不可欠な要素を指摘した。

## ハワイの先住民とともに考えた TPP反対論

ホノルル市内の公園にはモアナ・ヌイ会議の参加者はもちろん、約1000人の反APECのデモ隊が集い、ホノルル市内を練り歩き、街中で「モアナ・ヌイ声明」が響き渡った。「いぬわい」である大海原の潮の流れ

でつながった私たち、「MOANA NUI」の人びとは、APECに象徴される、貪欲な資本主義的やり方でのちと大地を商品化すること、歪められた情報と秘密裏の貿易交渉による協定には、一切手を貸すことはいらないことを宣言するものである。

私たちは、自由な形で、事前に情報を提供され、そのうえで合意を形成することを切望する。そして私たちは、伝統的な方法と知恵に根ざした、相互協力を求める環太平洋における対話、行動、提言、太平洋地域の人びとの連帯の道こそを選択するものである」

(「モアナ・ヌイ声明」※翻訳 近藤康男)

ホノルルの会議やデモには、多くのハワイ先住民が参加していた。ハワイは19世紀以降のプランテーション開発とその後の観光開発で多くの先住民が迫害され、土地を奪われ、生きる権利を失った歴史を持つ。ハワイ大学で熱帯農業やコミュニティを研究し、デモ行進に参加したヘクター・ペレンスエラ教授は「自由貿易によるインパクトは先住民をはじめ、小規模農家(ファミリーファーム)を直撃します。NAFTAが締結された結果、小規模農家が南米・メキシコの土地を追われ、ハワイにもやって来ました。モノカルチャー(単一栽培)的な大規模農業は環境を破壊

し、資源も枯渇します。土地や土壌、伝統、コミュニティといった小規模農家にとつての生活基盤は、企業の農業が進めば駆逐されます。その延長線上にあるTPPは間違った方向です」と語った。

今回はAPEC期間中の慌ただしい旅だったが、学者だけでなく現地の住民にも出会うことができた。ホノルルの中心街から車で1時間ほど走ると、約2・4ヘクタールの土地でラディッシュやケールなどの野菜を育てている「モハラ・ファーム」にたどり着いた。農場主のマーク・ハマモト氏(47歳の曾祖父が1890年代に入植し、彼は5年ほど前からここで農業を始めたといい。「TPPなんてとんでもない。大企業よりローカルを優先すべきだ」とマーク氏。農場のあるオアフ島北西部のワイアレア市は、もともと砂糖のプランテーションが広がっていた



「モハラ・ファーム」のマーク・ハマモト氏。

地で、プランテーション時代の終焉とともに一面耕作放棄地となった。「儲からなくなれば土地を去る」を画に描いたような現実がわれわれの目の前に広がっていた。

「TPPに反対する人々の運動」の共同代表で稲作農家の天明伸浩氏(新潟県上越市)は旅を終えてこう語った。「今回、環太平洋諸国の人びとと出会い、世界から見れば日本は『経済強国』であることを再確認させられ、またTPP参加によって、日本の国家と大企業が世界の人びとに対する加害者になりかねないと感じました」。

2010年末から展開してきたTPP反対運動は全国に広がり、全国1774の都道府県・市町村議会の約80%がTPPに反対・慎重の意見書を採用し、国会請願では「TPP交渉参加反対」の賛同議員が363名と半数を占めるようになった。しかし、TPP反対論の中身を見てみると、自国への悪影響だけを強調するものが少なくない。「TPPに反対する人々の運動」は、「加害者としての日本の行動を批判し、改めさせる運動を世界の人びとと連携して進める」という自分たちのスタンスを明確にし、国内外の個人・団体と連携した運動を引き続き展開したいと思う。

03

# 仙人の雑読・濫読 03

秋山眞兄 / あきやま・なおえ  
APLA共同代表



『小沢昭一——僕らのハーモニカ昭和史』  
(2011年、朝日新聞出版)

「はんのうれん」の大澤忠夫・つた子さんご夫妻は、『苦海浄土』一

## 震災・音・言葉

昨年5月、震災後の岩手から宮城の海岸線を3日かけて訪ねた。大きな町では瓦礫の撤去が始まっていたが、どこも沈黙が支配していた。私は作曲家・武満徹(故人)の『音、沈黙と測りあえるほど』(1971年、新潮社)を思い浮かべ続けた。昨秋は福島原発から20〜50kmの町々を何回か訪ねたが、やはり沈黙が覆っていた。「生きている世界には沈黙と無限の音がある。私は自分の手でその音を刻んで苦しい一つの音を得たいと思う。それは沈黙と測りあえるほどに強いものでなければならぬ」(同書「筑豊は廃坑の地帯と化し」。私は「音」を「言葉」に置き換えて呻くしかなかった。今もこのことが頭から離れない。

04

# Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい?

重政栄一郎 / しげまさ・えいいちろう  
エディトリアル・デザイナー

『迷子の警察音楽隊』(2007年、イスラエル/フランス)  
【監督】エラン・コリリン 【出演】サッソン・ガーベイ、ロニ・エルカベツ



『迷子の警察音楽隊』  
販売元:ハピネット  
価格:3,990円(税込)

隣国の文化センター開設記念式典での演奏を依頼されたある音楽隊。鄙な町。出会ったのはアラブ人とユダヤ人、エジプト国民とイスラエル国民、そしてイスラーム教徒とユダヤ教徒。アラビア語とヘブライ語と英語が入り乱れて物語は進行する。このシチュエーションはある一定の型通りの物語を想像させるが、ここでは宗教上の軋轢、文化的な摩擦、政治的な諍いはない。描かれるのは冒頭の字幕が言うように、一夜の「大したことはない」出会いと別れの話、それだけの話だから……。

「大したことではない」人情話を描いただけではないであろう。でなければわざわざこんなシチュエーションにしないし、冒頭の字幕もない。そこに託されたメッセージは明快だ。しかし、これはイスラエル人によるイスラエル映画である。その町は低層集合住宅が建ち並ぶ真新しい町だ。メッセージの背後に政治的プロパガンダが潜んでいると考えたら、あまりにも穿ち過ぎだろうか? これが逆のシチュエーションのエジプト映画であつたら……、またパレスチナとイスラエルの間でこのような物語を想像してみるとどうか……? たいへん楽しい映画である。高い評価も得ている。邪推であろうか?

01

# 水俣と日本の今 その3

原田利恵 / はらだ・りえ  
環境省国立水俣病総合研究センター研究員



二列目左端おてんの案内を掲げる菜穂子さん。最後列中央で右手を挙げる草児さん。あはあマルシェにて。(2011年11月20日筆者撮影)

「父たちのやってきたことはすごいと思う」と評価する長男の草児さんは、日本生活協同組合連合会職員を経て2010年に帰水、ご両親と一緒に働きながら、地域再生に関する市の円卓会議にも委員として、人目を引くバックスバイキーヘアで参画しています。

## 「思い」を継ぐ

人芝居の砂田明さんに誘われ、患者さんの援農をするために1973年に京都から移住し、リヤカーで売り歩くところから販路を開拓しました。「水俣病の起った水俣だからこそ、こだわりの有機ミカンを」と美しい大きな瞳を輝かせて言う長女の菜穂子さんは、フィリピン留学の予定を変え、「同じエネルギーを使うなら地元でこの仕事にかけたい」と、2008年から一足先に戻っていた弟の基夫さんと一緒に家業を盛り立てています。完全無農薬の甘夏の花は化粧品会社へ出荷され、ネロリ化粧水に加工されています。草児さんや菜穂子さんから若手生産者は、現在、お茶農家の天野浩さんが代表を務める地域興しグループ「あはあこんね」で活動をしています。商店街のイベントと絡めてマルシェを開催し、水俣の海の写真をクリアファイアイルとして商品化するなど、戦略はしなやかです。ただ、水俣病に関しては、同世代よりも尖锐な問題意識を持っています。水俣病が起これなければ、彼らの親は水俣に来ることはなかったでしょう。「支援二世」の彼らは今、故郷水俣の次世代の担い手として、農業の再生と地域活性化という困難な課題に挑戦しています。

02

# マイストーリー ジャパン 日本に住む在日外国人たち 【第三回】



南相馬の立ち入り禁止ゾーン(20kmゾーン)の前で。

## 「イラク・ワリード・ホムダイさん」 Waleed al Joady

米軍が昨年12月15日に、イラクから撤退し、8年9カ月の占領を終えた。イラクの民間人の死者は10万人を優に超え、難民として170万人が国外に避難した。ワリードさんは、昨年8月イラクから来日した。日本で難民申請をするためだ。ワリードさんは、バグダッドで生まれた。1991年の湾岸戦争後、バス停で迷っている日本人女性に道を教えたことがきっかけで、日本のNGOやメディアを相手に通訳の仕事をするようになった。当時は国連の経済制裁が続き、公務員も仕事が終わるとタクシードライバーのアルバイトなどをしていた時代だ。イラク戦争が始まると、日本のメディアから引つ張りだこになった。自衛隊が派遣されてからはサマーワに駐在していたが、イラク国内の治安が悪化していくにつれ反米勢力からの日本に対する批判も高まった。取材はほとんど危険な領域に入っていく、ついにワリードさんに武装勢力から脅迫状が届く。「米国とともにイラク侵攻に加担する日本の報道関係の仕事をしている人間は、どんなに時間がかかろうが必ず殺害する」と書かれ、弾丸が同封されていた。しかし皮肉なことに、反米武装勢力と繋がっているとしてワリードさんは米軍に拘留されてしまう。刑務所には彼を脅迫した武装組織のリーダーも拘束されていた。ワリードさんの取材により米軍に拘束されたと思込んでいたそのリーダーは、刑務所の中でも「お前を殺す」と脅し続けた。2年後、ワリードさんが釈放されてしばらく経つと、そのリーダーも釈放されたためワリードさんは国を出る決心をしたという。故郷を遠く離れ、ひたすら難民申請の結果を待つ日々が続く。家族の安否が気になる。お金がないからアパートからはほとんど出ない。そんな彼の息抜きになっているのが、ボランティア活動だ。先日は福島で除染作業を手伝った。福島もワリードさんも、日本政府の無責任な政策の「つけ」を払わされている。

今回のお題

## ラオス産アラビカティピカ豆を使用したフェアトレード・ドリップパックプロジェクト

レポーター  
箕曲在弘 / みのお・ありひろ  
早稲田大学非常勤講師



この計画について説明したところ、7大学から15名ほどの学生が集まってくれた。学生たちは、製品、デザイン、イベント涉外、店舗涉外、広報など、8つの担当に分かれ、各自が責任を持って仕事を遂行し、それを代表の大沼早紀がまとめた。6月には全員が静岡の焙煎業者である(株)流通サービスを訪れた。服部社長による焙煎研修を受け、後日、担当者が焙煎を行い、3タイプの製品サンプルを東京に持ち帰ってきてくれた。7月には全員でサンプルの中からどの味にするかを決めると同時にパッケージデザインを決定し、8月、製



ラオス滞在時の集合写真。

■ 製品の完成した。この計画の核になるのは、ラオスの生産者のもとを訪れるスタディーツアーである。6泊7日の滞在中、(株)オルター・トレード・ジャパン(ATOJ)が提携しているJnai Cafe生産協同組合と、組合に所属する生産者の家庭を訪問した。帰国後、当初のパッケージデザインでは自分たちの伝えたいことが伝えられないということに急遽変更し、9月下旬の三鷹国際交流フェスティバルを皮切りに、各地の学園祭などで販売した。一方、

製品をカフェなどの店舗に置いてもらうべく、メンバー各自が渉外に行った結果、2011年12月現在、約10の店で販売していただいている。11月末の第一期の活動終了時には、当初の予定を上回る4500パックが完売した。メンバーは活動を振り返り、大学時代で一番思い出深い活動になったと語り、達成感を味わった。この活動では、大学生が自主的に社会と接点を持ち、プロジェクトを運営することで、フェアトレードについて内部から深く考えるきっかけを得ることができた。さらに、生産者と消費者を繋ぐという目標に向かって、学生が中心となってアクションを起こすという、社会実験の場になったといえる。この活動は、新メンバーを加えながらこれからも進化し続ける。

活動についての詳しい情報はこちらから <http://ft-drippack-project.jimdo.com/>

### 生産者と消費者はいかにして繋がるか

アトレードの核心は、消費者が自ら購入する製品についてこの誰が知っているのかを知り、他方で生産者は自ら生産した製品についてこの誰が消費しているのかを知る想像

力を獲得することにある。この課題に一步でも近づくために、私に関わるラオスのコーヒー生産者たちが生産し、輸出するアラビカティピカ豆をドリップパックとして製品化し、生産者の生活について取材した内容をパッケージ裏面のQRコードを読み取ることで、ウェブ上で見られるようにする計画、ドリップパック・プロジェクトを思いついた。この新たなプロジェクトを担うのは、フェアトレードに関心のある大学生たちである。2011年2月、フェアトレード・スチューデント・ネットワーク(FTSN)の会議を訪れ、この計画について説明したところ、

品サンプルが完成した。この計画の核になるのは、ラオスの生産者のもとを訪れるスタディーツアーである。6泊7日の滞在中、(株)オルター・トレード・ジャパン(ATOJ)が提携しているJnai Cafe生産協同組合と、組合に所属する生産者の家庭を訪問した。帰国後、当初のパッケージデザインでは自分たちの伝えたいことが伝えられないということに急遽変更し、9月下旬の三鷹国際交流フェスティバルを皮切りに、各地の学園祭などで販売した。一方、



	2
1	3
4	5

- 1 — ゼミのツアーでスラム街を訪問した際に、広場でバスケットをしていた少年たちと一緒にやらないかと誘われました。日本人学生全員でシュート対決に参加しましたが、結果はボロ負けで笑いに。やっぱりスポーツは世界共通!!
- 2 — バナナ生産者村での交流会の際、たくさんの料理でもてなしてもらったお礼に、持っていた浴衣を羽織ってもらい、カタカナで書道をレクチャー。カタカナを初めて見た彼らは「とってもきれいなね!」と、とても喜んでくれました。
- 3 — カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)を訪問。ブヒ、ブヒと鳴声が聞こえたので、振り返ってみると、ブタが売られていく直前の光景が。この姿を目の当たりし、改めて「食べる」とは命をもらうということなのだと考えさせられました。そして、その日の夕食は豚肉料理で……。たいへんおいしくいただきました。
- 4 — ブタの飼育小屋を見学させてもらった際、子ブタがちょうどオヤスミタイムでした。とても可愛かったです。しかしこの子たちもいつか売られていき、私たちがお皿の上に置かれるのかと考えてしまい、とても複雑な気持ちになってしまいました。
- 5 — イカオ・アコ(西ネグロス州で活動するNGO)のマングローブ植林の見学をさせていただきました。普段マングローブを見る機会などないので、水の中に生えている木がとても新鮮でした。

(2011年9月撮影)



このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容○アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA/あぶら事務局(TEL:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております!

## 編集後記

3.11以来福島を歩き、話し込み旅を続けている。そこには東京の脱原発運動では見えない世界があり、両者の溝は時が経つにつれ拡大している感じを持っている。今号はこの両者に橋をかける作業のささやかな試みのつもりだ。(大野)

今回の特集は、原発事故後、私たちの食を取り巻く状況をどう捉えていくかをテーマに取り組んだ。このテーマに関しては、それぞれ思うところがあるだろう。家族、生活している場所、仕事、環境、様々な要因で気にする点も変わってくるだろう。しかし、今回のように色んな立場の人の話に耳を傾け、対話の回路を築いていくことが大切なのではないかと思った。(吉澤)

「ゲシュタルトの折り」という詩がある。私は私のために生き、から始まるこの詩を、利己や孤立ではなく個の確立と受け取っている。この間APLAで取り上げた様々な立場の声から、自分の哲学を持つと同時に異なる立場を知る努力をし、理解を蓄積・更新し続けることが、この先も変わらぬ課題であると感じた。ところでハリーナに関わるのは今号で済みです。ありがとうございます。(松田)

## ハリーナ HALINA

2012年 vol.02-no.15  
2012年03月1日発行

〔編集長〕  
大野和興

〔編集者〕  
吉澤真満子、松田麻衣子

〔表紙写真〕  
長倉徳生

〔デザイン・制作〕  
十年舎

〔編集・発行〕  
特定非営利活動法人APLA  
(APLA/あふら: Alternative Peoples' Linkage in Asia)

〒169-0072  
東京都新宿区大久保2-4-15  
サンライズ新宿3F  
tel. 03-5273-8160  
fax. 03-5273-8667  
e-mail info@apla.jp  
URL http://www.apla.jp

〔印刷〕  
株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。  
[http://www.apla.jp/05/05\\_halina.html](http://www.apla.jp/05/05_halina.html)

## 事務局の動き(2011年11月～2012年2月)

11月 1日～30日	グリーンコープ共同体“fromネグロスセミナー”が行われ、大橋と吉澤が各地を訪問しました。[グリーンコープ生協ふくおか、グリーンコープ生協さが、グリーンコープ生協ひょうご、グリーンコープ生協おおさか、グリーンコープ生協くまもと、グリーンコープ生協おかやま、グリーンコープ生協ひろしま、グリーンコープかごしま生協、グリーンコープ生協やまぐち、グリーンコープ生協みやざき、グリーンコープ生協おおい(日付順)]
11月 1日～	「福島の子どもたちに届けよう・バナナ募金」開始
11月 18日～23日	互恵のためのアジア民衆基金第二回総会と交流ツアー(インドネシア・パプア州)に秋山、廣瀬、野川が参加しました。
11月 27日	「これからのフェアトレード—震災を越えて—」に出展しました。
11月 30日	パルシステム埼玉・平和活動団体交流会に松田が参加しました。
12月 3日	二本松有機農業研究会を秋山、疋田、吉澤が訪問しました。
12月 17日	「バナナ募金」お届け先の福島県伊達市・仙林寺の寺子屋を吉澤と松田が訪問しました。
12月 17日	全国有機農業推進協議会・関東集會に疋田と野川が参加しました。
12月 19日	三春収穫祭の反省会に、吉澤が参加しました。
12月 28日	福島県有機農業ネットワーク、日本国際ボランティアセンター(JVC)、アジア太平洋資料センター(PARC)との打ち合わせに吉澤・野川が参加しました。
1月 10日	二本松有機農業研究会を秋山、疋田、吉澤、野川で訪問し、打ち合わせを行いました。
1月 12日	青山学院大学・フレッシュアーズセミナーの授業で吉澤が講義しました。
1月 19日～26日	フィリピン・北部ルソン、ネグロスへ秋山と吉澤が出張しました。
1月 21日	APLA presents つながる広げのお話会・第2回を開催。
1月 24日	第1回カネシゲファーム・ルーラルキャンパス財団の理事会に秋山、大橋が出席しました。
1月 28日	エネルギー勉強会連続セミナー「原発とわたしたち」第1回開催(他NGO5団体との共催)
2月 1日	学芸大学付属高校社会科見学実習において、APLAの活動について吉澤が話をしました。
2月 4日	APLA理事会・評議員会開催
2月 5日	APLA presents つながる広げのお話会・第3回を開催。
2月 6日	パルシステム埼玉・平和募金贈呈式に野川が参加しました。
2月 11日	エネルギー勉強会連続セミナー「原発とわたしたち」第2回開催(他NGO5団体との共催)
2月 13日	フォーラム・アソシエ「アソシエーション・フォーラム2011～会員の集い～」に野川が参加しました。
2月 17日、18日	第4回「BMW技術基礎セミナー」に吉澤と野川が参加しました。
2月 26日	二本松有機農業研究会を疋田、吉澤が訪問しました。

## 事務局からお知らせ

## 以下の呼びかけに賛同・参加しました。

- TPP協議に関する情報公開と市民参加の申し入れ【賛同】

## 事務局スタッフの入れ替えがあります。

APLA立ち上げの時からスタッフとして働いてきた松田麻衣子が、3月末日をもって退職することになりました。事務局の細かいことから、販売関連、会計、ホームページデザインなど多岐に渡り仕事をしてくれました。松田がいなくなると寂しくなりますが、新しい道で頑張ってもらいたいと思います。後任は、赤石優衣が着任します。赤石は、2011年12月まで他のNGOのフィリピン駐在事務所でインターンとして約2年働いていました。今後、事務局の窓口的な存在となりますので、皆さんどうぞよろしく願います。

## APLA会員限定のメーリングリストを不定期に流しています。

まだ登録されていない方はぜひ登録してください。(事務局までご連絡ください。info@apla.jp)

From Papua, Indonesia 【インドネシア・パプア州より】

インドネシア・パプア州からの  
チョコレートを支援!

制的小国として、パプア人は社会的、経済的、精神的な差別にありながらも、自分たちの文化や人権が守られるべきことを主張し、独立運動を展開してきました。パプアの独立を望まないインドネシア政府はこうした実態を国際社会から隠そうと画策し、国軍を駐屯させて人びとを管理・弾圧しています。

近年、インドネシアが外貨獲得のために力を入れている

産業がパームオイルとカカオです。そのカカオが乱開発の原因とならないよう、パプアの人びとのための産業となるよう、カカオの民衆取引が始まることになったのです。きっかけはパプア州で活動するNGO・YPM Dとの出会い。2010年に設立された互恵のためのアジア民衆基金(APE)のメンバーでもあります。YPM Dとカカオ生産者たちにとって、カカオの加

工や事業を起こすことは初めてのことで。試行錯誤の連続のカカオの民衆取引。この取り組みをAPLAでも応援していきたいと考えています。その第一歩として、パプアのこと、カカオや生産者のことをより深く知るためのブックレットとDVDの製作をすすめています。(APLA事務局長・吉澤真満子 ■)

けた結果、12月1月には現金が底を尽き、食べものすらないような状況となってしまいました。ATITからも自分たちが実施するコーヒー代金の前払い以外にも、米の支給を緊急救援という形でできないかという相談がAPLAにあり、事務局で検討した結果、12グループ(213世帯)に対して、米の緊急支援をすることを決めました。

APLAとしては、生産者たちの自立のためには、こういった「モノの支援」が継続されるのは好ましくないと考えます。そこで、支援は基本的に今回限りのことで、今後は自分たちで自給できるように生産者グループの組織化や貯蓄プログラムを始めることを確認し合ったうえで、クリスマスホリデーに入る前に米の配布を実施しました。2ヵ月分で一世帯60キロというのは決して十分な量とはいえませんが、それでも生産者たちからは感謝の声が届いています。(APLA事務局・野川未央 ■)

From East Timor 【東ティモールより】

コーヒー生産者に対して  
米を緊急支援しました。

2011年、東ティモールでは、コーヒーの収穫量が昨年との比較で1/2から1/3と大幅に減少しました。裏作年ということもありましたが、前年の乾季により、花の大半が落ちてしまったことが原因です。一方で、供給量の大減により

2から2/3くらいにとどまっています。とはいえ、収穫シーズン終了直後の9月には、

農民から「数ヵ月でコーヒーによる収入が尽きてしまう」という不安の声があがっていました。そして、オルター・トレイド・ティモール社(ATIT)には、来年のコーヒー代金の前払いを年内にしたいという要望が続々と届けられました。

APLAとしては、生産者たちの自立のためには、こういった「モノの支援」が継続されるのは好ましくないと考えます。そこで、支援は基本的に今回限りのことで、今後は自分たちで自給できるように生産者グループの組織化や貯蓄プログラムを始めることを確認し合ったうえで、クリスマスホリデーに入る前に米の配布を実施しました。2ヵ月分

「パプア」と言うと、パプア・ニューギニアのことを思い浮かべるかもしれませんが、ニューギニア島の西半分はインドネシアに属します。第二次世界大戦後、もともと植民地宗主国であったオランダに再度領有され、カカオはそのオランダ時代にもたらされました。1961年には西パプア共和国として独立したものの、領有権を主張するインドネシアが軍事侵攻し、イリヤンジャヤ州として併合された歴史を持ちます。

大自然に囲まれ、天然資源が豊富なパプアでは、多国籍企業による鉱山開発や不法な森林伐採が横行しています。また、インドネシアによる強



生産者グループのみんなも加わって荷下ろし中。

望が続き、11月に現地に入り、生産者に聞き取り調査をか

たから感謝の声が届いています。(APLA事務局・野川未央 ■)

東 日本大震災、それが引き金となって発生した東京電力福島第一原発の事故により、私たちが生きる社会・世界が大きく揺るぎ、新しい価値観への転換に向けた取り組みが必要とされています。そうしたなか、APLAは、福島とともに歩み始めようとしています。その経緯と今後の方向性をここに提案します。

## ネグロスからアジア、日本へ

APLAの前身団体である日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)の活動のきっかけとなったネグロス島で発生した飢餓。それは「作られた飢餓」と呼ばれたように、植民地時代から長く続いた大土地所有制度という構造的な問題が原因となって引き起こされたものでした。APLA発足後には、ネグロスでの経験の共有をベースとして地域自立に向けた取り組みを東ティモールで始めましたが、ここでもやはり植民地経済や天然資源を巡る利権争いが人びとのいのち・暮らしを奪ってきたという現実と直面しました。

APLAが掲げてきた「創り出したい未来」の方向性は、元々こうした視点にもとづいたものです。植民地支配の覇権主義やその後のグローバル資本主義によって奪われてきた人びとの暮らし、地域内での自給・自立・自治。それらを再び自分たちの手に取り戻すために、日本をはじめとした先進国と呼ばれる国が突き進んできた道ではなく、もうひとつの道(オルタナティブな道)をアジアの人びと、特に農村で生きる人びととともに模索し、試行錯誤する過程を歩み始めたところでした。

その過程において、「支援する」「支援される」という関係性を克服し、国際協力という枠組みを超えてアジアの人びとと対等な立場に立ち、それぞれが生きる場所での地域自立にどう取り組めるかを模索してきました。そのための知恵や経験の交流を進め、それを交換できる仲間たちの出会いの場を創り出すことがAPLAの役割です。

JCNCの22年の活動を経て再出発したAPLAは、for NEGROS(ネグロスのために)から from NEGROS(ネグロスでの経験を発信していくこと)を合言葉として、ネグロスを軸にしつつ、「地域自立」をめざす北部ルソン、東ティモール、インドネシアのアジアの農民どうしの交流を、そして日本の農民とアジアの農民との交流を進めてきました。その「地域自

立」には、「安全な食とエネルギーの自給」が含まれます。その具体的な取り組みとして、現在ネグロスのカネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)では、有畜複合農業と適正技術を組み合わせた循環の構築や、バイオガスや自動揚水器による自前のエネルギー生産が始まっています。

現在、福島の地で農業を続けていく、続けざるを得ないと決断している農民たちが直面している課題は、「地域の再生自立」であり「安全な食とエネルギーの自給をめざす」ことだと考えます。APLAが主要な活動地域としてきたアジアの場合とは事態に至った原因や経緯は異なりますが、今、共通の課題が浮き彫りになっています。

地主との土地闘争を闘い抜き、自分たちの土地を耕し始めたエスペランサ農園のリト・エスタマさんは、日本ネグロス連帯25周年の節目に際して、「私たちがどん底にある

とき、日本のみなさんはここに来て、私たちと一緒に泣き、共感し、考えてくれた。だから強くなった。それが大きな支えとなり、みなさんとの連帯があったからこそ、今がある」と語っています。JCNCそしてAPLAがネグロスと培ってきた、失敗も成功もともに分かち合うという関係性。こうした経験を福島にもつなげていくことこそ、

APLAだからできることではないでしょうか。

## 3.11後、これまでの経過

3.11後、この「APLAだからこそできること」について、理事会、評議員会、そして事務局内で数々の議論を重ねた末に、いくつかのポイントが浮かび上がってきました。

- APLAは、出会った人びととの関わりからできた拠点を元に活動を展開してきた。
- 原発の問題は、すべてのいのちに関わる根源的な問題であり、原発と持続可能な農業は共存できない。
- 自分たちの足元で起きた原発事故による影響を脇に置いて、アジアの地域自立に取り組むことはできない。

「経済成長」という大義名分のもと、基本的人権や地域社会を犠牲にしなが、大量生産・大量消費を推し進めてきた結果の象徴ともいえる原発事故。今回の原発事故によって福島の人びとが抱えることになった苦しみは、地震や津波という自然災害とはまったく異なる人災であり、もはやその裏側にある構造的な問題を無視することはできませ

ん。また、原発事故が引き起こした様々な問題を福島だけに押しつけないためにも、まずは、被災した農民の方たちから現状や思いを聞くことから始めることにしたのです(APLA Report no.5に掲載)。

その時に、APLA共同代表の疋田美津子が所属する〈しらたかノラの会〉とつながりがあった〈JAみちのく安達・二本松有機農業研究会(以下、二本松有機農業研究会)〉の皆さんと出会ったことをきっかけに、以後二本松に通い始めました。

## 福島は今

すでにご存知の通り、福島第一原発から大量に放出された放射能は、二本松を含む中通り地方にも多大な影響を及ぼしています。線量が非常に高い地区もあるなかで、県内外への避難を決めた人、ふるさとに残ることを選んだ人、それぞれがとても苦しい決断をされたことは想像に難くありません。二本松有機農業研究会のメンバーの中でも、避難した人、残った人、そして「原発がまだどう収束するか分からない。今後もここで農業を続けていけるのか、不安だ」と悩み続けている人……それぞれが苦悩と葛藤を抱えています。

しかし、悩みながらも、震災直後から土を耕し、作物の力で農地の除染や再生を手探りで進めてきた二本松有機農研の皆さん。毎日が実験と試行錯誤の連続です。2011年の夏野菜は、放射線量の値も低くほぼ全量を出荷できたものの、その後、二本松市内の米から暫定基準値を超える500Bq/kg以上のセシウムが検出されたために、「福島産」という理由で新米はほとんど売れていない状況が続いており、どう生きていくかで精一杯の現在。地元メディア以外では、ほとんど情報が流れていませんが、福島では自殺する農家があとを絶たないと言います。経済的なことばかりではなく、「生きるためのモチベーションが必要。今までは自分が作ったものを手にとって喜んでもらうのがうれしかった。今では、喜んでもらえないどころか、買ってもらえなくなってしまった」という言葉も重く響きます。

福島県内での地産地消を取り戻すことが最終目標とはいえ、それには相当な時間が必要でしょう。その過程で農家が立ち行かなくなれば、地域が崩壊してしまうのは自明です。しかし一方で、これまで地産地消をともに築いてきた人たちが、被ばくの危険にさらされている子どもたちを守ろうとするのは当然です。同時に、農家の方たちも同じ思いを抱えています。こうした分断やジレンマも原発事故が

もたらしたものです。

二本松に残った人たちは、自分が育ったふるさとを守りたい、地域を再生していつか若い人たちが戻ってこられるようにしたい、先が見えないなかでも、どうにか希望につながる突破口を見つけたい……と考えています。こうした福島の苦悩や苦勞を“見える化”し、共有していくことが必要なのではないのでしょうか。

## APLAが取り組んでいくこと

この間APLAは、何度も二本松を訪問し、二本松の有機農業者が抱えている問題・課題・思いを聞き、APLAとしてできることは何かについて共に考える時間をもってきました。そして、最初の一步として「福島百姓未来塾」の実施と「にんじんジュース」などの物産販売に取り組むことにした次第です。

また、放射能汚染地域で苦闘している幼児施設に少しでも安全な食べものを届けたいと考え、「福島子どもたちに届けよう・バナナ募金」を開始し、2012年2月現在、浜通り・中通りの10数施設にバラゴンバナナを贈る活動を進めています。以上に加え、福島第一原発の事故は、東京電力と日本政府に責任があるという点を追求していく



にんじんジュース用のにんじんを収穫する二本松有機農業研究所のメンバー。

こと、また、原発と核の問題は、日本だけではなく世界的な問題であるため、政府が推し進めている原発輸出への反対や、福島の経験を海外へ伝えていく活動も重要です。同時に、新しい社会を創るための価値観の転換期にある今こそ、アジアの仲間から多くを学ぶことができるという実感もこれまでの経験から得ています。それらを包括的につなぐ動きもあわせて模索していきます。

今後、福島とともに歩む道筋や具体的な活動計画がすぐに明確になるわけではありません。直面している事態そのものをどう捉えるのか、どうすれば乗り越えられるかは、誰もが暗中模索、戸惑いのなかにあるといえます。まだまだ時間が必要でしょう。しかし、この深刻な事態の中から少しでも立ち上がり、歩み始めるための試みに協力していくことから、少しずつ道筋が見えてくるはずですよ。

APLAの会員の皆さまに、以上の経過と当面の活動についてご理解くださるようお願いするとともに、今後の活動のついてのご意見やご提案を寄せてくださるようお願いいたします。